

『平家物語』 国語教育の一側面 (2)

— 那須与一伝説の広がり的魅力 —

武田 昌 憲

はじめに

古典教育の魅力はいろいろあるが、作品そのものを鑑賞して行くについて問題も見受けられる。―日常使い慣れない旧仮名遣いに対する抵抗感、やたらと多い文語体の古典文法特に活用形や敬語・・・是が試験に出るのでいやいや覚えさせられる―に対する拒否感などなど、これらの障壁をどのように取り除いていくかが、魅力を妨げている一要素であるかもしれない。もちろん、我が国の古典は世界に誇れる伝統文化の代表でもある。古典の読みは古代以来、延々と継承されてきた日本人固有の共有物である。言うまでもなく、新『学習指導要領』の特質の一つである「伝統や文化に関する教育」(↓)は古典教育にも優位な方向付けでもある。これに答えて教育の現場でもアクティブラーニングの実践報告等の各

種の試みがなされている。その古典教育の材料の中でも、最も有効な作品の一つが『平家物語』である。多少身量厚かもしれないが、古典の割には語りの要素が入っているため読みやすく、声に出しても調子も良く、なんといつても歴史的史実を捉え、登場した場所や登場人物も実在がほとんどである。歴史の転換点を描くことにもなるので日本史とも連動しやすい(合戦・戦争自体、大きな歴史の転換点であることが多い)。何よりも子孫を含む登場人物の関係者が、様々な形(地縁・血縁その他の興味等)で今日も関わり、関心を持つてくれることが多い作品である。

しかし、教材としての『平家物語』の面白さはテキストの享受や琵琶法師による語りだけではない。「生きる力」そのものの舞台の中での生きた授業をど

う行うかは教員の技量や関心の度合いが大きい。以上の事を踏まえて、教材としての「那須与一」と、その伝承について一言述べたい。

1、与一の伝承

古典教育の中でも『平家物語』はもつともよく扱われる作品である。冒頭部「祇園精舎」は別にしても、特に「那須与一」「木曾最期」等によく扱われる。ところが教材研究はテキストだけで止まってはいないだろうか。たとえば「那須与一」を取り上げた場合、諸本としての『源平盛衰記』にも載る。実際の授業で『源平盛衰記』を扱うことはほとんどないが、伝承の幅広さを示すだけでも興味を持ってくれる生徒がいるかもしれない。それと同様に、全国各地の与一伝承の存在が、意外と『平家物語』の親密さを生徒に示すことになるのではと思う。中には地域挙げてその伝承を保存し、行事として地域の振興に寄与しようとしているものも少なからずある。

そこで、那須与一関係の伝承地を全国から少し探し出して指摘してみた。

那須与一関係の伝承地等⁽²⁾

北海道

青森県 十和田市に神楽の曲目に「那須与一」がある等。

岩手県 大東町に那須氏栄える等。

宮城県 栗原市に白山神社の例大祭で、与一が巨大な扇を射る「馬乗渡し」がある等。

秋田県 常陸から佐竹氏移封に伴い移住した那須家がある等。

山形県 米沢市に米沢藩重臣の菩提寺跡に与一の供養塔がある等。

福島県 会津美里町に「那須与市郎」と書いた立札を立てると大豆が無事に実る等。

茨城県 真壁郡の伊勢神領は与一が献納したという（『理齋隨筆』）等。

栃木県 那須与一の本拠地。伝承が多くある。鹿沼市に那須大八郎と鶴富姫の墓もある等。

群馬県 甘楽町に与一が在住し弓の稽古に励んだという地がある等。

埼玉県 扇の的を射た恩賞地「太田荘」がある等。

千葉県 八日市場市の大堀城の城主那須大角は与一の兄朝隆が祖等。

東京都 大田区太田神社に与一の守り本尊という木像がある等。

神奈川県 鎌倉市に与一の屋敷跡が、厚木市に一供養塔がある等。

山梨県 甲府市木稻積神社は那須氏ゆかりの神社等。

長野県 扇の的を射た恩賞地「角豆荘」がある。諏訪に与一の兄弟が隠れていた等。

新潟県 三条市に与一ゆかりの木杯・腰旗がある。越後那須氏は与一の室が新田義重の娘である等。

静岡県 愛知県 豊田市に八草城主那須氏が栄えた等。

岐阜県 美濃市立花・佐々坂地区には那須姓が多く、その地の六角堂は那須家由来のものである等。

富山県 石川県 加賀守那須某が見える（大日本史国郡司表）等。

福井県 扇の的を射た恩賞地「東荘宮川原」がある。

勝山市に能楽「延年那須」がある等。

滋賀県 彦根市法蔵寺に与一の矢を所蔵。近江市、大津市にも伝承がある等。

京都府 京都市即成院に与一の墓がある。扇の的を射た恩賞地「五箇荘」がある等。

大阪府 豊中市超光寺は与一が出家したと伝える等。

奈良県 桜井市の長谷寺に与一が参拝した等。三重県

和歌山県 田辺市長野八幡神社に与一が持参した御神体がある等。

兵庫県 神戸市須磨区に与一の墓がある。篠山市にも伝承がある等。

鳥取県 下野那須七騎の一家伊王野氏が栄えた等。島根県 太田市・飯南町に与一の墓がある等。

岡山県 井原市に与一や備中那須氏の墓がある。扇の的を射た恩賞地（荏原荘）がある等。

広島県 安芸太田町に与一の墓がある。福山市にも伝承がある等。

山口県 下関市の稗田氏は与一の兄稗田九郎朝隆

の子孫等。

徳島県 石井町に与一が扇的を射た矢が飛んできた所が伝わる。与一夫婦の墓がある等。

香川県 高松市に与一の射た時の駒立岩、祈り岩等がある。

愛媛県 東宇和郡野村町に与一が熊野神社を勧請してこの地に住んだ等。

高知県 土佐の那須氏は与一の兄四郎久隆の孫である等。

福岡県 みやま市に幸若舞の曲目「扇的」がある等。

大分県 庄内町に豊後那須氏が栄える等。

宮崎県 椎葉村に与一の弟大八郎と平家落人鶴富姫の伝説がある等。

佐賀県 伊万里市や大和町の「石つき唄」に那須与一がうたわれている等。

長崎県 対馬に古代那須氏のゆかりの神社がある等。

熊本県 五家荘に、与一の嫡男小太郎宗治が、扇的の場にいた玉虫御前と結ばれた。御船町にも

伝承がある等。

鹿児島県 島津氏に仕えた那須氏がある等。

沖縄県

以上の都道府県ごとの伝承地等から見ると、北海道や沖縄県を含む数県に伝承等が指摘できない地域がある。が、『平家物語』の他の伝承、例えば源義経やその一族や家来の伝承、また平清盛関係者の伝承を見ると日本全体を覆う無数とも言うべき膨大な伝承ネットワークがあることがわかる。空欄の北海道では義経の伝承があちこちにある。同じ空欄の静岡県は富士川の合戦で知られ、頼朝の配流の地、伊豆の蛭が小島等多くの源平の遺跡があることでも知られる。同富山県は加賀・越中境の俱利迦羅峠の合戦等、義仲伝承など多く見受けられる。同三重県に至っては伊勢平氏の拠点でもあり、遺跡の豊富さは云うまでもない。同沖縄県も平家落人伝説の地として知られる（もつとも平家落人伝説地は全都府県にみられる）し、為朝伝説も眠る。⁽³⁾

また、那須与一宗隆（資隆）の兄弟も兄が十人いるのでそれぞれが住まいの地名を姓にし（森田太郎

光隆、佐久山次郎泰隆、芋淵三郎幹隆、福原四郎久隆、那須五郎之隆、滝田六郎実隆、澤村七郎滿隆、堅田八郎義隆、禊田九郎朝隆、戸福寺十郎為隆)⁽⁴⁾、各地で栄えることとなった。那須一族は那須姓だけではないことが知られる。

個人情報報の制約もあるかもしれないが、あくまで古典の歴史事項と、現在の伝承は素直に指摘してみるとよいのではと思う。

2、『源平盛衰記』

『源平盛衰記』には、那須与一の扇的の異本を載せることで知られる。「玉虫」の記事を載せる該当文を掲載する。

〔(前略)〕

沖より、莊かきりたる船一艘、渚に向うて漕寄す、二月廿日の事なるに、柳の五重に紅の袴着て、袖笠かづける女房あり、皆紅の扇に日を出したるを杖むちに挟みて、船の舳頭に立て、是を射よとて、源氏の方をぞ招きたる。此女房と云ふは、堅礼門院の后立の御時、千人の中より選び出せる、雑司に玉虫たまむしのまへ前共云ひ、又

は舞前まひのまへとも申す、今年十九にぞ成りける、雲の鬢霞びんろうの眉、花の面子雪かほはせの膚、絵にかくとも筆も及びがたし、折節夕日に耀きて、いとゞ色こそ増りけれ、斯りければ西国までも召具せられたりけるを、出されて此扇を立てたり、此扇と云ふは、故高倉院嚴島へ御幸の時、三十本切立て、明神に進奉あり、皆紅に日出したる扇なり、

(中略、与一が扇的を射た後、)

玉虫は、

時ならぬ花や紅葉をみつる哉 芳野 初瀬の麓
ならねど

(後略)〕

扇的の前に立った女性は「玉虫前」という美女であった。「時ならぬ花や紅葉をみつる哉 芳野 初瀬の麓ならねど」と咄嗟に歌を読むことのできる才女でもあった。この玉虫前伝説も「玉虫御前」として、詳細は省くが那須与一伝説と絡んで各地に点在するもの『平家物語』らしい頒布ぶりである。扇の由来も記述し、話題に事欠かない。全国のどこかでこれらの伝承が土着し、地元のものとなっている可能性

もある（また、地元から作品に反映される場合もありうる）。

勿論『平家物語』の伝承は那須与一や木曾義仲にとどまらない。平清盛、源義経関係の伝承・伝説は与一や義仲どころではないほど全国に分布している。古典のテキストでもこれらが教材としてよく扱われるのも、意外と身近な思いを持っているからかもしれないし、同時に身近に感じさせる作品であるという認識も読者（ここでは主に生徒）に持ってもらうとよい。

3、時間軸と空間軸が古典の魅力

那須与一の伝承が地元の伝承と結び付けられないだろうか。そうすることによって古典教育と身近な接し方ができる一方法と見る事も出来るのではないか。一例としてではあるが、与一の伝承をきっかけとして、地元の伝承を改めて意識して教材に取り上げられる可能性もある。古くからの地域の伝承がテキストと関連付けられるとすれば、生きた教材として伝承も組み込むことができはしまいか。もともと

各地域の伝承の程度にもよるだろうが。

特に『平家物語』のような軍記物語は登場人物も豊富であるし、場面も平安京だけでなく、全国に活躍の場がある。そしてその関係者も全国に広がりその子孫も膨大な数となって今に栄えている。こう考えると古典（特に歴史文学）と現代は無関係ではないということがわかる。現代にいるからこそ時間軸と空間軸を操作して、たとえば、その時代の作品を昔の人物がいた同じ空間で味わうという楽しさが生じてくる。そのような、いわば「ゆとり」を持つた多面的教育ができれば、人間教育の一端として生徒に与える影響は大きなプラス効果が期待できるのでないだろうか。

以上、テキストを読む、から、諸本の面白さを見る⁶⁾、そして、地元の伝承を知る、へと連結して行けば、現実と遊離した古典世界ではなくなると思う。古典の教授のあり方として言語活動の活用が言われ、「読み比べ」を行うなどの言語活動がよく提唱されているようだが、意外と教材は身近な地元にもいろいろな形で存在しているようである。

代表として今回取り上げた那須与一の扇的の一場面は、特定の時期の特定の場所、即ち元暦二年（二二八五）二月、讃岐の国（香川県）屋島、での合戦のひとコマだけではないことがわかる。

注

1、例えば、林教子「高等学校国語科における新教科書・新教材の傾向と特質―新学習指導要領下での変革―」（『早稲田大学国語教育研究』35号 平成27年3月）では、「今次改訂の学習指導要領の特徴を端的に示すとすれば、「言語生活の充実」と「伝統や文化に関する教育」を重視していることであろう」と指摘されている。

2、参考資料として『天的那須与一』（那須義定 叢文社 一九九三年）『華的那須与一』（那須義定 叢文社 一九九八年）「全国の与一伝承」（太田市那須与一伝承館）等

3、『平家物語事典』（大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子編、平成二十二年 東京書籍）「伝説・

総説」による。

4、『寛政重修諸家譜』による。

5、拙文「『平家物語』国語教育の一側面―諸本の事など―」（『尚綱語文』4、平成二十七年三月）